

G.E.Moore の倫理学

上 憲治

About the Ethics of G.E.Moore

Kenji Kami

1 初めに 倫理学の問題

倫理学の分類は簡単にはできないが、一応理想主義、功利主義、厳粛主義、(論理)実証主義、指令主義を事例として挙げられる。

G.E.Moore はこれらの倫理学に対して、新しく倫理学の樹立を目指した。とりわけ当時のヒュームなどの影響による価値問題の阻害的状况に対して、科学的取組と対等な価値の学を目指した。

そのためどうしても科学が根拠とする sense-data に匹敵するような価値の基礎となるものを定立する必要があると考え、その基礎づけとして「善」を置いたのである。

2 この論文の主な参考資料

G.E.Moore のその取り組みは、主に以下の履歴によって見ることができる。

1873	G.E.Moore ロンドンで誕生
1903	Principia Ethica
1912	Ethica
1922	Philosophical Studies
1942	The Philosophy of G.E.Moore (ed. A.P.Schlipp)
1953	Some Main Problems of Philosophy
1958	G.E.Moore ケンブリッジで逝去
1959	Philosophical Papers
1962	The Common place Book of G.E.Moore (ed.Casimir Lewy)
1966	Lectures on Philosophy
他重要資料	
1958	Philosophy and Common Sense by C.D.Broad
1972	The Language of Moral Philosophy by R.M.Hare

とくに1903年の「Principia Ethica」はムア40歳の時の発刊で、読む仲間に驚愕を持って認められた。所謂、Naturalistic Fallacy は従来の倫理学の基本姿勢を覆すものであった。快楽や信仰を倫理学の基本観念と

することを論駁し、善に替えるものであった。

この善はいかなるものであろうか。これから展開する善の定義や分析や認識という技術的な取り組みについては多くの言及がある。しかし「善」の内容についての明確な言及は知らない。私はカントが道徳法則をテーマとし、ベンサムが快楽をテーマとしたように何故ムアが「善」をテーマとしたのかに興味がある。カントが厳粛さを大変重視し、ベンサムが幸福を重視したようにムアは善を重視したといえるが、この場合にはカントやベンサムのような明らかなイメージを得ることができない。「善」はもう少しイメージし難いものである。つまり掴みどころがない。しかし全くイメージの外にあるというものでないと思っている。

最終的にはこの点を考えることを目指して、手続き上の必要性から以下技術的なところを述べていく。

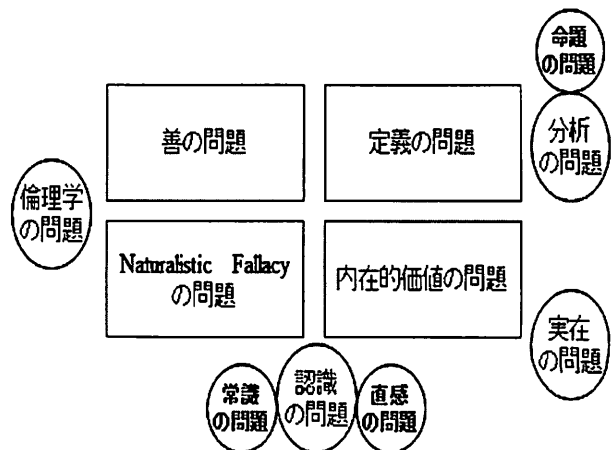
3 ムア倫理学の問題の構造

ムア倫理学の Naturalistic Fallacy は倫理学の基礎を組み立て直すはめに陥り、諸課題の再検討を展開した。その問題構造を整理すると以下ようになる。

善の問題、定義の問題、Naturalistic Fallacy の問題、内在的価値の問題を中心として関連課題が散りばめられている。

善の問題は2で述べたように技術問題を越えたところにあり、この論文のゴールとなる。

問題の構造



定義の問題には分析や命題の問題が論じられ、Naturalistic Fallacyの問題は諸問題の作動点であり「善」へのマップや道標として整理され、内在的価値の問題は実在問題を考察し、善の特殊な位置を示す。他に認識の問題として常識や直感の問題が実在問題と関わって取り扱われる。

4 Naturalistic Fallacy の概要

先ず、Naturalistic Fallacy はいくつかの問題を複合したものである。

①善は定義できない。分析できない単純観念である。②善の認識は直覚による。それは common sense によって明らかである。③善は自然的観念によっては定義できない。つまり快樂のような心理的観念では定義できない。しかし快には心理的観念でない観念もある、と言えなくはない。善が心理的観念を表示していることもあるように。④善は形而上学的観念によっては定義できない。神に忠誠を誓うことは善であるという定義などがある。

自然主義的誤りを引き起こすものは、ヒュームの価値情緒説において、心理的な現象を価値と考えるところや、形而上学的実体を設定してそれに向かう態度を善とするところなどに起因する。こうした多様な問題を含んでいる。

5 T.Baldwin はムアの第2版序文での Naturalistic Fallacy の内容を以下のようにまとめている。

- ①善を何らかの善以外の述語と同一視している。
- ②善を何らかの分析可能な述語と同一視している。
- ③善を何らかの自然的なあるいは形而上学的な述語と同一視する。

これらの内容が含まれている問題は

- ①善と他の性質の混同（自然的性質や形而上学的観念で定義する誤り）
- ②認識と認識対象との区別
- ③定義主義者の誤り（バトラー僧正のいう「すべてはそれであるところのものであり、他のものではない」であり、定義そのものが成立しないことになる。）
- ④善が分析できないことと自然主義的誤りとは本質的には無関係であるが、それも含まれている。

こうしてみると Naturalistic Fallacy は多くの混同について誤りを指摘する原理となっている。それらの問題をいくつか取り扱ってみよう。

6 定義について

Naturalistic Fallacy の指摘で戸惑いを与える問題はバトラー僧正の言うように定義ということが成立しな

いのではないかということである。定義には以下のようなものが考えられる。

①恣意的な言語的定義で命名するような場合に使われる。②正当な言語的定義で辞書的な定義である。③分析的定義（分割的定義）で分析可能な複合的な対象の場合に可能な定義である。④直示的定義は A.White の言う定義で、善か黄色など、分析できない観念を示す定義である。（後年ムアは、黄色を分析できない観念から改めた）

ムアの善の定義については、次のように整理できる。

①善は分析できない単純観念なので定義できない。②善に関する命題はすべて総合的命題で、定義が分析的定義であればできない。③その根拠を Common Sense に置き、明らかであると主張している。

定義できない善の存在は直感によって捉えられ、認識問題に関係づけられる。

7 分析と直感

分析には3つある。①常識分析の方法（一般的意味としての観念を分析する）、②概念分析の方法（観念そのものだけを分析する、検査（inspection）によって明証となる。）③命題分析の方法（文を形成する要素（言語）の指示観念の分析で、「命題とは語の集まりが説明しているものである」を基礎としている。）

また直感には①常識的直感（Moral Sense を例とする心理的直感）と②分析的直感（それ以上分析できない最終項を直感する検査（inspection）技術的方法であり論理的直観）がある。

この分析と直感の関係からムアは善の自明性を、概念分析による論理的直感に置いている。

8 分析の問題

ムアの分析に対して A.White は以下の3つの分析をあげ、ムアの善について矛盾を指摘する。

①検査（Inspection）分析は既知のものが正しく説明されているかを検査し、知識とその対象が一致しているかを見る。

②分割（Division）分析は分析定義と同じく、概念を要素に分析して定義づける。

③区別（Distinction）分析はいくつかの概念の関係を見る分析で、ムアはこの分析を自覚していない。

ホワイトの批判点は、ムアの善が隠喩的で、言葉「善」は指示するが対象確認できない心理的現象であるということにある。このホワイトの観点はムアが善を上記のような評価言語と考えている一方、記述言語とも考えている点を矛盾していると指摘するところにある。つまり心理現象でありながら内在的（Intrinsic）であるのは矛盾であるというのである。

そしてこれはムアが区別分析を考慮していないところに起因すると考えられている。

ホワイトによって矛盾だとされた指摘は、ムアの善の個人の認識とその存在とにかかわる重要な指摘と言える。

9 認識の問題

ムアは、善は定義されたものとは一致しないが認識されたものとは一致するとする。つまり善は定義できないが認識できると主張していることになる。

ここではムアは善と一致する3つの認識を挙げている。①心理的認識は心の中の過程としての認識である。②真理的認識は命題の真理を意味する認識である。つまり命題と定義とは違うものである。③立証根拠的認識は信じるための根拠に関する認識である。

つまり、ムアは善の認識を可としている。ところでA.Whiteと同様に岩崎武雄氏もムアが一方では善は認識できると言い、もう一方では善は認識できないと言っているとしてその混乱を指摘している。岩崎氏は、ムアは定義のうちの一般的定義では善の認識の可能性を示し、分割的定義では分割の最終項である善の認識を不可能としていると指摘しているのである。

この問題は非常に込み入っているところである。同じ言葉が幾つかの層の幾つかの用法を示して複雑な機械設計図のように入り乱れている。その状況観察の一部として表にしてみると次のようである。

倫理学原理

	定義	分析	命題	認識	自然対象を構成	自然対象の性質	be in time	内在的 intrinsic	存在	ヒュームの説
善	x	x	総合的	直感 inspection	0?	0	x	内在的 価値	内在的 存在	価値 言語
自然的 性質	0	0	分析的 総合的	Sensation	0	0	0	内在的 性質	自然的 存在	事実 言語

第2版序文、他後期の見解

	定義	分析	命題	認識	自然対象を構成	自然対象の性質	be in time	内在的 intrinsic	存在	ブロードの説
善	x	x	総合的	直感 inspection	x	内在的 固有性 ascribe	x	内在的 価値	内在的 存在	派生的 derivative
自然的 性質	0	0	分析的 総合的	Sensation	0	自然的 内在的 固有性 describe	0	内在的 性質	自然的 存在	物的対象の 属性

(G.E.Moore's Latest Published Views on Ethics (by C.D.Broad 1961 in 'Inited Value' No.28)

10 問題の構造と経過上の対比

3であげた問題の構造を善と自然的性質に対比し、また前期と後期の変化を表してみた。A.Whiteや岩崎氏の指摘のようにムア自身はつきりしないところもあり、この表が正しいかどうか不明なところもあるが、

おおむねこういうことではないかと思う。

中でも変わっているところは自然対象と善の関係であり、その認識や実在との問題は微妙に不明確だと言える。

11 Naturalistic Fallacy は善の問題である。

Naturalistic Fallacy は以下の様な善の問題を含むものである。

1) 善の用法的問題

言語は我々の用途に応じて使われ、同じ言葉が多用に使われる。

善という言葉は自然的性質（快樂）を意味する用途もある。

したがって言葉ではなく、言葉の示す意味が問われなければならない。

しかし我々の言語は乏しく、用途は多い。

そこでコミュニケーションの齟齬が起こる。

2) 善そのものとそれを示す用法としての善

善という言葉があるからその対象があると考えるのは当然である。

その対象は幽霊狩り(G.ライル)で言われる実在化のせいであるかもしれない。

そしてそういう実在はないものかもしれない。

しかし何を善とするかは偶然的でも、善の観念は普遍性がある。

ピアジェによれば育児過程で発生する観念であるが、としてもそうであろう。

12 内在的ということ

善の認識と存在の問題は内在的価値 (Intrinsic Value) の問題が中心である。

内在的ということは、①主観でも客観でもない、②自然的でも形而上学的でもない、③内在的性質によっているものである。

そこでは①存在の問題、②認識の問題、③論理の問題などがその課題である。

13 内在的価値の構造

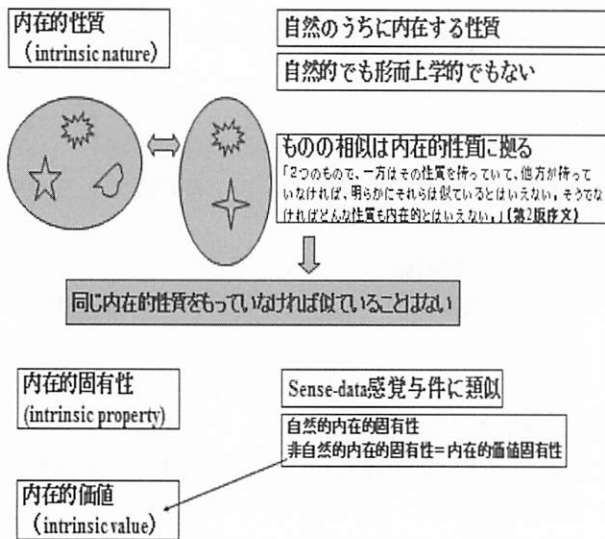
①内在的性質 (Intrinsic Nature)

善は内在的価値であるが、それが依っている内在的性質とは自然のうちに内在する性質であり、自然的でも形而上学的でもないものである。また物の相似は内在的性質によるといわれている (第2版序文)。図で示すと次のようであるが、2つのもので、1方がある1つの内在的性質にかけると2つのものは類似しない、というものである。

②内在的固有性 (Intrinsic Property)

内在的固有性は sense-date (感覚与件) に共通す

内在的価値の問題



る。それには自然的内在的固有性と非自然的内在的固有性の2つがあり、非自然的内在的価値固有性は内在的価値固有性のことである。内在的価値固有性は内在的価値を定義づける。

つまり内在的価値を知るには sense-data について調べなければならない。

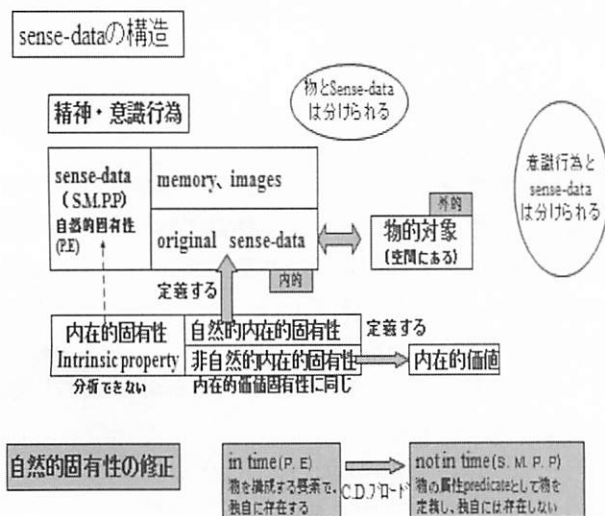
14 sense-data

ムアは sense-data の実在を主張し、それは善の実在を主張する根拠となる。

実在とは、想像的事物は実在ではないが、Nature (自然) は実在であるとされるものである。自然とは物的存在と精神的実体とそれらの関係を内包する全体であり、宇宙 (Universe) を意味する。

ムアによると①感覚与件 (sense-data) もまた実在である。ただし物とは区別され、感覚行為とも区別される。また②個人的のものでもない。つまり③時や状

sense-dataと実在の問題



況によって変わる sense-quality (感覚特質) ではなく、④変化しやすいものではなく、⑤その物との一致は直覚によって明らかであり、⑥物の認識は sense-data を介してであって、直接ではない。

15 sense-data と内在的価値の関連構造

① 存在論の立場

ムアの P.E. においては、sense-data は物と対応はしているが、物からは独立して実在している感がある。また、精神や意識行為からも分けられ、ムアの実在論的立場が示されている。(これは C.D. Broad の指摘によって S.M.P.P. では独自には存在できず、物の属性 (predicate) であるというように変わっている。ここでは P.E. の主張を述べ、次の16以降でその変化とその後の展開を見る。)

② sense-data は P.E. の自然的固有性に類似し、同じものと見なし得る。sense-data は original sense-data と memory や images といった対応するもののないものからなっている。sense-data は内的 (internal) に独自に存在するもので、ムアの実在論的姿勢を示している。

そのうち original sense-data は空間に存在する外的 (external) な物的対象と対応関係にあり、その事実は common sense によって自明であるとされる。

③ 自然的固有性 natura property は内在的固有性 (intrinsic property) に対応すると思われる。関係内容は不明だが sense-data に位置すると思われる。

④ 内在的固有性はこれ以上分析できないもので、 α . 自然的内在的固有性 (natura intrinsic property) と β . 非自然的内在的固有性 (non-natura intrinsic property) からなる。

⑤ α 自然的内在的固有性は original sense-data (本源的感覚与件) を定義づける。

⑥ β 非自然的内在的固有性は内在的価値固有性 (intrinsic value property) に相応し内在的価値を定義づけるものである。

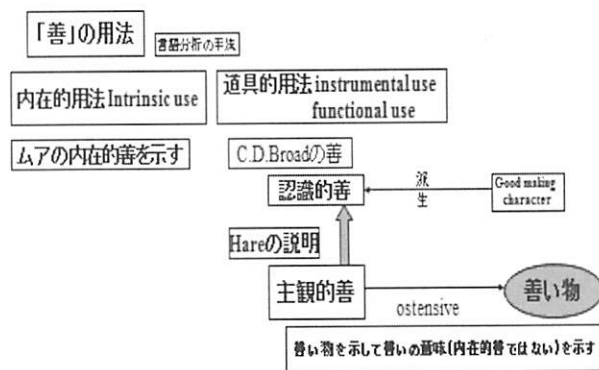
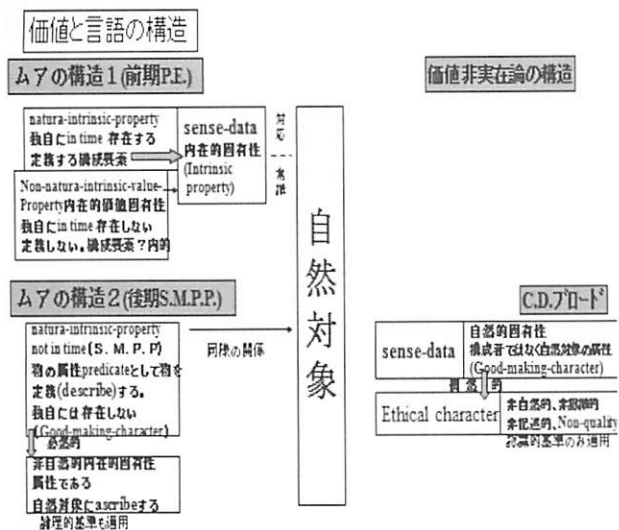
16 ムアの価値構造の変化

P.E. を前期とし、S.M.P.P. を後期として変化をみる。

① P.E. では α 自然的内在的固有性は時間の中 (in time) に独自に存在するが、S.M.P.P. ではそうではなく時間の中に (in time) 独自で存在するのではなく、物の属性 (predicate) として物を定義 (describe) する。

② これは C.D. Broad が言うことに影響されたことかと思われる。

Broad は、自然的固有性は自然対象の構成者ではなく、その属性でしかなく、価値 (Ethical



Character) は、その自然的固有性の good making character から偶然におこるものと主張している。これは非自然的で、非認識的で、非記述的な non-quality なるものである。

③これに対してムーアの主張は、good-making-character と非自然的固有性 (内在的価値固有性) との関係は必然的であるというものである。また Broad の ethical character と違って、これもまた物の属性であるとし、自然対象に ascribe (帰する) ものと考えられている。

一方自然的内在的固有性は自然対象を describe (記述する) ものとして区別している。

ムーアの価値は論理的基準を適用し、ブロードは認識的基準を適用していると言える。

この2つの価値は同列に比較されるべきではない。

17 R.M.Hare の価値構造

ヘアは言語分析の手法を用いて言葉「善」の用法からムーアの内在的善 (intrinsic good) とブロードの善の相違を説明する。

図のように、ヘアは言語「善」の2つの用法を提示する。1つはムーアの内在的善を示す「善」の内在的用法 (intrinsic use) である。もう一方はブロードの言う派生的な善を示す「善」の道具的用法 (instrumental use, functional use) である。ヘアはこのブロードの認識的善を主観的善とも言い、良い物を指し示す (ostensive) 「善」であると言う。つまり善い物を示すことで善の意味 (内在的善ではない) を示すのだと言う。

それではムーアの内在的善とは一体どのようなものと理解したらよいのであろうか？

18 ムーアの倫理学の目的

価値論としてはヒュームの「価値と事実との分類」やブロードの認識論的な偶然の産物としての主観的価値説は分かりやすいかもしれない。そしてこの価値説は否定されるべきものではないかもしれない。好き・嫌いや楽しい・苦しいなどは生活上欠かすことはできないものでもある。しかしムーアによればこれらは自然的で心理的であり、善に関わるものではない。好き・嫌いや楽しい・苦しいは価値以外の何かである。しかしムーアのように一刀両断にはできない気もする。

しかしここではムーア倫理学の目指しているところを先ず明確に探ることを目指したい。

私は、ムーアの言う「善」は論理的には明確化され、論理的直覚によって認識されると言われているが、普通の意味で認識されないこともないが、大変微妙なものであると感じる。

ムーアが言いたいのはこの善が物的感覚や形而上学的理性の網には引っ掛からないものであるということではないかと思う。しいて言えば善をとらえる網でもなければできないということではないだろうか。もっと言えば、善を知るための善覚とでもいうものでしか捉えられないのではないかと思う。

そしてムーアが善を倫理学の基礎に置いて示していることは、「善」はムーアの全人格を語り、ムーアの高い霊性を示しているものではないかと思う。それが「べき」や「正義」や「幸福」をではなく「善」を倫理学の中心に据えた理由だと思う。

「善」はムーアの深い人間観を示しているものと考えられる。善を体現しようとする高い人間性の追求がここにあるのではないかと思う。つまりムーアは単に倫理学の樹立をテーマとしたのではなく、理想倫理の樹立をテーマとしていたのである。

私はムーアの「善」はそうしたものを物語っていると考えているが、これを理解することはかなり微妙な領域だと思う。「善」は「善」の意味のもっと後ろの世

界から微かな善の風を我々に運んでいるが、我々はなかなかそれを感知することができないのではないかと
思う。

19 ムアの善の直覚

ムアの善はだれもが直覚できるのか？ 実はその直覚が難しいので、用法的善や自然的善と混同する (naturalistic fallacy) ののである。一方ではその直覚はだれでも身に覚えがあるのでムアの説に納得するとも言える。つまりムアの善の直覚は明快でありながら
靈妙でもある。こうしたムアの「善」はムア倫理学の特質を示すもので、高尚で芳醇で慈愛に満ちていると思う。人間や宇宙の理想はこの善を求めて、善たろうと
するところにある、と思われる。

この「善」は言葉や観念を超えて、それらの手に掬いとられることなく我々に浸みこんでおり、ふとした時にわれわれの意識に現れては、捕まえられない間もなく霧散してしまう。我々は明証なものを求めそれによって明証さが得られるが、明証はまた我々を縛りそこにコンクリートする。明証は靈妙な、現れては霧散する捉えられないものを排除し、「善」の世界を不明の底に沈める。

いまや靈妙なものを明証に実証することよりも、靈妙を靈妙のままに受け入れ、その明証ならざるものをどう扱うかをマスターする方法に意義がある。

21 善の実在性

実在か否か、認識か認識不可かを問わない立場

モラルセンスは個的な感覚によるから、善は分散して倫理の基準が喪失してしまう。一方、善の実在説はその認識に問題があり、客観的な確認ができないということに陥る。

しかしこれらの「善」は同じ「善」という言葉を使っているが、全く別のものである。

ムアの Naturalistic Fallacy はこれを明確に主張しているのである。

そのうえでムアの「善」を想念すると、感覚認識できるかと言えば感覚を超え、もの的な実在かと言えば実在を超えているものである、と思われる。

認識の前に、あるいは同時に行為、むしろ意思が生まれ、在る前に発生がある。したがって認識の生まれる前の直覚と、実在にア・プリオリであることが言われる。

こうしたムアの倫理学は善を目指して歩む道を示そうとするものではないかと考える。